広瀬誠一郎と利根運河

新四国相馬霊場巡り 2008 年夏のコース別冊資料

画像データ 01　　利根川と江戸川をつなぐ、利根運河の位置　地図

埼玉県　↑江戸川　↑常磐道　国道 16 号↑　利根川(右上)↑

人口河川の利根運河は埼玉県の利根運河開削許可条件である利根川による水害防止策として、江戸川から利根川へ流れるように開削されました。又利根川からの逆流防止のために狭窄部(きりっぷ)を数箇所設けてあります。

画像データ 02　　利根運河の風景

川蒸気「通運丸」の錦絵、千葉県立関宿城博物館蔵

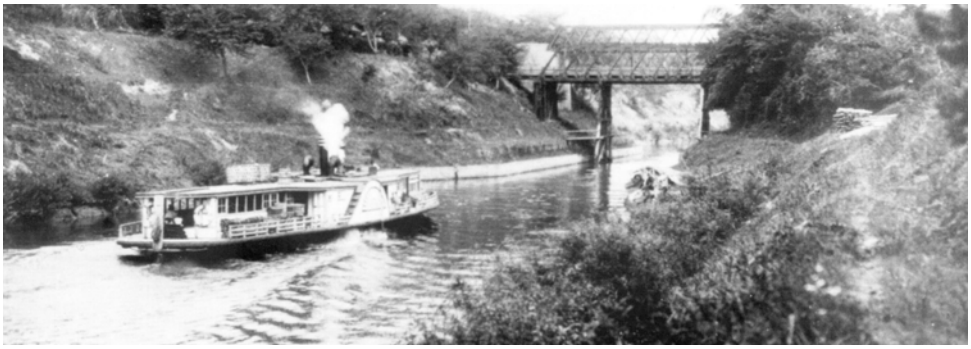
「通運丸」は明治33年に水海道から戸頭、布施と鬼怒川から利根川、利根運河を利用して江戸川を下り東京へ定期運行された川蒸気船です。

利根運河により水海道や取手、土浦や銚子から東京への交通の便が短縮されました。水海道桟橋から東京まで乗客扱いの定期便「通運丸」は上り８時間下り 14 時間を要していましたが昭和初期まで水運は賑わいました、

利根運河は水運旺盛時代に完成、しばらくして、明治29年常磐線が大正２年11月常総線が開通する。

広瀬誠一郎
所蔵　広瀬篤氏

広瀬篤様の所蔵品、誠一郎。



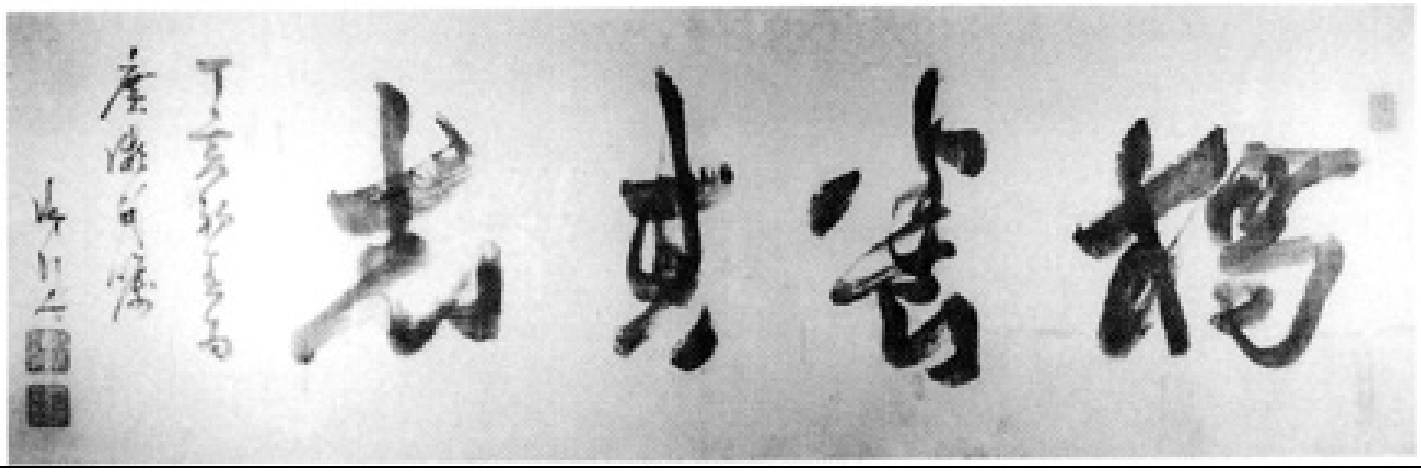
利根運河を航行する川蒸気船、スクリューを使わない外輪船でした。

川底が浅い為に水深に影響のない、舟の両側に外輪を付けた外輪船は川に向いていたのです。動力を持たない船は、曳沿道を利用して船を引張りました。

千葉県流山市に利根運河碑がある、しかし広瀬の名は刻まれていない。※

※　碑を建てた当時の人たちが、意図的に広瀬誠一郎を外しました。この碑は史実を正しく語っていない・・！
所在場所、東武鉄道野田線運河駅下車にて東京理科大方面、利根運河水辺公園内にあります。

画像データ 03　　広瀬家に残る、勝海舟直筆の書



「独(ひとり)其の志を養う　明治 20 年初春　廣瀬氏の嘱(頼み) 勝海舟」、勝海舟日記に「一人同道」とある？

画像データ 04　　赤松資次郎が描いた明治 32 年頃の岡堰は、誠一郎の改修工事で桜の名所となる。

取手市立山王小学校所蔵「山王村沿線誌」
←　「藤代町史　暮らし編」の表紙より

写真データ 05　上昇気流にのるサシバ(差羽、大扇)

利根運河は渡り鳥のとおり道
４月、南方より飛来し日本で繁殖して、10 月頃には再び南方へ渡る、タカ目の猛禽類サシバの通り道です。
つくばＴＸの「おおたかの森」駅辺りも含まれます。

広瀬誠一郎と利根運河

天保９年(1838)下高井に生誕、明治 23 年３月に他界享年 54。

かつて利根川・江戸川間を航行する船は、両川が分岐する関宿を経由しなければならず、また、鬼怒川合流点までの利根川には浅瀬が多いため、渇水時には大型の高瀬舟では航行が困難という問題がありました。

利根運河計画はこれらの問題を解決するもので、茨城県北相馬郡選出の茨城県会議員であった、広瀬誠一郎が当時の茨城県令人見寧(ひとみやすし、旧名、勝太郎、天保 14 年(1843)～大正 11 年(1922))に陳情し、人見がこれを受けて推進しました。利根運河を派川(ばせん)利根川とも呼びます、また開削当初は「三ケ尾沼」名から三ケ尾運河ともいわれました。　画像データ 01　を参照下さい。

利根運河開削までの変遷。

江戸に幕府を開いた徳川家康は、政策の第一歩として大利根川の大改修を関東郡代伊奈忠次に命じました。

伊奈家は三代に渡ってこの大事業に取り組みましたが、赤堀川の通水には 60 年に及びほぼ完成しました。

利根川は、渡良瀬川と合流して江戸湾に流れていました、現在は関宿で利根川と分流して江戸川と言われています。新たな利根川は、関宿から常陸川までの陸地(赤堀川)を開削して、古河が水源であった常陸川にドッキングさせ、小貝川下では、布佐と布川間の小さな水路を拡張して銚子で太平洋に流れる大河となったのです。これが「利根川の東遷」の主な目的であり、江戸市中の洪水対策でした。利根川は、やがて下総の地方に大きな繁栄をもたらすことになります。明治期になり、水運による水産物や農産物の商業ルートとなり大型の船が往来し河岸は活気づきます、更に、利根運河による江戸川までの距離の短縮は、往復の定期船が運航するまでに発展したのです。

利根運河の設計に当たったのがオランダ人技師ムルデル等で、工事は明治 21 年(1888)に開始され、23 年 6 月に竣工しました。利根運河の開削によって、関宿を経由して東京に向かっていた船は航路をこれまでより 33Km も短縮し、日程も 3 日を 1 日に短縮することができました。

明治中期から大正時代にかけて隆盛をきわめた利根運河も、その後の鉄道の発達や道路の整備拡充により通船は減少の一途と水害の修復費により衰退して昭和 16 年に、運河としての役割を終えました。

1941 年、国有地となり水質改善の研究河川となり、河川敷は運河水辺公園として整備され、東武野田線運河駅近辺から運河沿いは、桜の名所にもなっています。新四国利根運河霊場八十八ヶ所(倫書房より)が現存しています。

広瀬誠一郎の生涯　　画像データ 02 を参照下さい。

取手市下高井の高源寺、ケヤキ地蔵のある寺として取手市内では有名な所に、千葉県野田市と柏市に残る、利根運河開削に生涯をかけた廣瀬誠一郎の墓があります。門前近くには誠一郎の生家である居宅があります。

明治 15 年相馬群長という役職で岡堰の改修を行い、桜の苗木を堤防沿いに植樹したおかげで、最近迄桜の名所になっていました。小貝川越しに谷原三万国の水田の彼方に筑波の峰を望む岡堰は、茨城百景に選ばれています。

利根川は明治期になると、関宿回りの航路に問題が起きました、当時既に鬼怒川と小貝川の分流開削工事は済んでおり鬼怒川は守谷で小貝川は小文間で利根川に合流していました。しかし鬼怒川合流地上流の利根川に中州ができたために大型船は通行できず「我孫子と流山問は陸路をとるしかない」という結論でした。運河開削(かいさく)の気運はこの頃に始まったと云われております。

明治 14 年（1881）春、茨城県議会議員の広瀬誠一郎（翌年に北相馬郡長となる。）は、茨城県令（明治 20 年以降は県知事）の人見寧に、茨城～東京を直結する要路の必要性を説き、人見県令も運河の必要性を重要視するようになりました。この案は直ちに国の内務省に進達され、基本調査が何回か行われました。

明治 16 年の調査では、オランダ人技師ムルデルが起用され、2 年後の 2 月、流山深井新田から柏船戸までの 8.5km 余りの問を適地とした利根運河計画書を内務省に提出しました。しかし、内務省の計画は遅々として進みませんでした。

このような中、明治 18 年、人見は県令を退き、当時の千葉県令は鉄道論者で運河建設には消極的であったことなどがあり、翌 19 年 8 月広瀬は北相馬郡長の公職をやめて運河に全精力をつぎこむことにしました。

明治 20 年になると内務省から財政上の理由によって政府事業は断念したという通知が届きます。広瀬らは、もはや運河は民間人の手でなければできないと判断し、自費で利根運河会社を設立し人見を社長としました。

当時の広瀬と人見、そして後から加わった色川誠一と共に「利根運河の三狂生」とさえいわれ、その精力的な活動は世の語り草ともなったのでした。

工事は、明治 21 年 7 月 14 日に起工式を行い、およそ 2 年の歳月ののち、利根運河は、明治 23 年 2 月 25 日全線通水となり、5 月 10 日すべての工事が完成しました。

運河は、水面幅 18m、深さ平均低水位 1．6m、渇水期でも 1.1m の水位を保たせ、曳沿道の幅も 1.8m を確保していました。江戸川から利根川へ流れ出るように、また洪水時の逆流防止の為の狭窄部が設けられています。

同年の 6 月 18 日には、栄光の竣工式が行われ、山縣総理大臣、西郷内務大臣、芳川文部大臣、石田千葉県知事、蜂須賀東京府知事、安田茨城県知事、内村大阪府の知事が出席した大式典であり、いかにこの事業が当時の政治、

経済、社会に与える影響が大きかったかを伺い知ることができます。しかし誠一朗は、運河竣工の三か月前に亡くなっていました。

広瀬誠一郎と岡堰　　画像データ 04 を参照下さい。

岡堰は古来、景勝地としてされてきましたが、とくに、明治 32 年、煉瓦造りに改築してからは、赤茶色の明治的西洋風の構造物が青色の水に影を落とし、周囲の樹木の緑に映えて、一層その名が高くなりました。

それ以前の明治 19 年 4 月 3 日、北白川能久親王殿下が岡堰を巡覧されてその風光を称賛され、桜木の植樹料を賜ったので、当時郡長の広瀬誠一郎が堤防上に植樹して以来、一躍、桜の名所として名を馳せました。

毎春、花の咲くころは、数千人の花見客で賑わい、サーカス小屋も張られたほど。しかし、昭和 28 年以降、堰が全面改修され、名物の桜も姿を消し、その一部が残るのみですが、今でも春には大勢の人が訪れて桜の花見を楽しんでいます。　　取手市埋蔵文化財センター、資料より

堰の戸を　打って素足や　春の草　　素十

取手出身の高野素十の句、岡堰に堰の戸(瓦を積む)作業をする人の足元に生えるゲコッ葉(当時の取手では「おおばこ」を言った)で困難な仕事を行う作業姿を詠む、素十お得意の客観写生の風景句で、岡堰を詠んだ句です。

勝海舟と広瀬誠一郎　勝海舟、文政六年 1 月 30 日(1823 年 3 月 12 日) – 明治 32 年(1899 年 1 月 21 日)

江戸城無血開城で知られる勝海舟は晩年、利根川の和田沼(わたぬま)に鷹狩りに訪れていたようです。説の根拠は柏市布施にあった旅籠を営んでいた頃の先代の話を聞いている御子息からお伺いしたお話しです。

和田沼は、雁や鴨の渡り鳥の飛来地で江戸時代から雁猟で知られるところでした、シーズンになると布施の旅籠は猟師の宿泊客で賑おうたそうです。布施弁天から利根運河までに大きな沼が 6 沼あり、総称して和田沼といいました(現、田中遊水地　柏斉場下)。徳川慶喜や有馬候らの名士が明治 20 年頃雁猟にお訪れていたそうです。

この頃、廣瀬と人見寧はじっこんの関係であり、勝海舟と人見寧も明治 3 年に薩摩へ遊学の際、西郷隆盛に面会を申し出る為、勝海舟から紹介状と十両の旅費を受けているほどの師弟仲でした。画像データ 03 を参照

「勝海舟日記」に、明治 20 年 2 月 18 日**「人見、一人同道・・」**とあります。廣瀬家に残る「書」の年月と同じ頃であり、「一人同道」こそ勝の私邸に人見と訪れた広瀬誠一郎ではないでしょうか？

更に、明治 12 年 4 月 6 日**「利根川を下り、キリップ**(狭窄部、川の流れを弱める為に、川の中に杭を並べて打ちその中へ大きな割石を据えた護岸)**を見る。初夜、帰宅」**と記され、利根川に来ていることは間違いない。

広瀬は人見を通して勝海舟に「書」を願望したのかは定かではありません。だが利根運河に関しては勝海舟も周知の筈であり、勝海舟の趣味であった狩の案内役として土地勘に精通していた広瀬誠一郎の存在は適任ではないでしょうか、人見は誠一郎への書簡も認めていますし、又広瀬宅に何度も訪れていたほどの仲で親友のようでした。

利根運河は渡り鳥のとおり道　　写真データ 05、参照

布施の旅籠には、なぜか GHQ が日本を制した戦後、米軍人がどこで知ったのか猟に来るようになりました、彼らの乱獲により、和田沼から鶴や雁は勿論のこと鴨の姿さえ消えてしまったといわれています、和田沼は田中遊水地となり現在は遊水地の外堤防として埋め立てられ沼の姿は残っていません。[余談]、外堤防は柏斎場と隣接しているのですが、焼香客用駐車場に碑があり、かつての布施城跡であることが記されていました。

サシバ(差羽、大扇)は、５月頃日本本土で繁殖します、上昇気流に乗り高空から一気に遠くへ飛行するため、トンビと間違われますが、タカ目の猛禽類です。

守谷の野鳥調査資料によると。取手の城根(雁金山)辺りから下高井、戸頭辺りまでの範囲は、渡り鳥の飛行地域のようで。そのルートは筑波山周辺から桜川(つくば市)を経て小貝川岡堰、布施の利根川湖沼、柏の葉公園、流山の江戸川へ、さらに埼玉県浦和の見沼へと南下します。又、水海道の官生沼から利根運河利根川河口の三ケ尾沼を経て飛来する鳥たちも合流するそうです。同野鳥の会は現在でも、鷹の仲間である冬鳥のノスリや夏鳥のサシバなどの観察を行っており、10 月と 4 月の早朝に運がよければ、その姿を見ることが出来るそうです。

新取手「ふれあいの里」の相野谷湖に鴨が沢山飛来する冬、ふれあいの里の関係者の話で「先代の所長が餌付けしたから」と聞きました、鴨の飛行地域であったからこそ、餌のある池で羽を休めてくれる渡り鳥を守りましょう。

新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会委員会　熊倉　　2008/06/25 記